

# 『木戸孝允日記』のガイド本

萩博物館特別学芸員 一坂太郎

『木戸孝允日記』は重要で興味尽きない内容を備えているのだが、かと言って、どのように読めばよいのか、初めて史料本を購入したような若い読者は戸惑っているかも知れない。

そのためのアフターケアか否かは知らないが、今回マツノ書店は妻木忠太『史実考證 木戸松菊公逸事』を復刻するという。これは、同じ著者による大著『松菊木戸公伝』から洩れたような逸話を、史料などから拾い集めたもの。上中下篇から成るが、中下篇で頻繁に引用されている史料が『木戸孝允日記』なのだ。「公の日記×月×日の條に」といった言い回しが、繰り返し出て来る。『木戸孝允日記』の、「ガイド本」としての役割も果たしてくれるだろう。引用部分を、もとの日記で確認してみるだけでも楽しい。幕末から明治初年にかけての政治・経済はもちろん、靖国神社や上野公園の誕生、人力車やローマ字の発明まで、どこからでも読めるし、読んでいて飽きない。

同時に復刻される『史実考證 木戸松菊公逸話』は、木戸を知る人々からの聞き書き集だ。編者はやはり妻木忠太で、『逸事』の姉妹篇である。木戸といかに親しかったかを主張したいため、いささか虚勢を張っているような談話者もいて（誰とは言わないが）、そんなところも、なかなか楽しい。

維新三傑の一人として  
幕末日本の最先端を  
駆け抜けた男のすべて！



予約限定復刻

マツノ書店

鳥尾小彌太(子爵)氏の談話

四二二

## 内容見本

世には、余が野村(○端)と同伴して、山縣に廢藩置縣を説いたが如くに傳へるものがある。が、其の實は、余は洋行の志を陳べんとして山縣を訪ひ、會是日野村が來訪したので、話が少々齟齬してゐるのである。なほ廢藩は木戸公の平生の素論であつて之に賛成し、西郷は別に議論なくして、一語したのみである。然れども、廢藩の斷行も、西郷の如き大度の人があつたので、速かに成就したと思はるのである。

著者曰く、野村靖は是時東京にあつて、七月十一日の公の日記に「今日野村靖亦來る」と見え、公を訪ふてゐる。が、まだ明治政府の官吏でなかつた。其の始めて宮内權大丞に任じたのは、是月二十三日である。そして鳥尾小彌太が廢藩の謀議に參與しなかつたことは、公及び利通の日記で知らる。なほ之を有朋に談議したことも、見るものがないのである。さて公は聲の報を聞き、七月八日先づ隆盛と會合し、廢藩斷行の大改革を審議して、遂に之を決した。公の日記に「三字過退出」し、時雨、西郷と對談、大改革の事件數條を議定す」とある。翌九日の夕刻、公を始め聲有朋等長藩人と隆盛・利通及び兵部權大丞西郷從道・同大山巖の薩藩人とが、相集まつて其の順序を定め、十四日に至つて、廢藩置縣の大詔が頒發し、茲に斷行せられたのである。公の日記九日の條に「今夕、西郷兄弟・大久保・彌助・井上世外・山縣素狂等集會、此度廢藩論の順序を論ず、知事免職の一條は、一般の知事東京着の上、發令之都合也、余竊に愚考する、今日迅速相發、期限を立、三百藩の知事を東京登るの令を下すに如かずと、然るときは、不伏ものは、自ら斷然の所致あり、天下諸藩形情を見るに足ると、諸氏同意、談論及「二字、皆散」とあつて、公は速に諸藩の知事を東京に召集し、應ぜざるものは、之を處分すべき堅固の意見を論じ、衆みな之に賛同したので、十四日に大詔が發せられたのである。なほ當日の光景と公が多年苦楚辛慘を具にしたる感想とは、同じく其の日記に次の如く詳かである。

十四日雨、六字參朝、諸官中小進退あり、大隈・板垣參議に被任、大木民部卿・井上兵部大輔・山縣兵部大輔・岩倉卿外務卿に被任、知事公・島津・山内・鍋島等へ、今日廢藩の令發するに付勅詔あり、名古屋・池田・細川・蜂須賀の諸知事、改正の建言有之しに付、別に勅詔あり、皆小御所也、於「大廣間」第二字出御、五十六藩の知事被「召出」、廢藩の勅詔被「仰出」、一統當官を被「免」、於「于此」、七百年來の舊弊、漸其形を改む、始めて稍世界萬國に對峙の基定ると云へし、余御一新の際、諸藩京都の戰爭よりして、東北の戦引つき、漸一年を経て、天下平定、然して藩々互に肩を比し、薩は長を見、土は肥を窺ひ、各皆日本内の事に着目し、遠く宇内の大勢を一觀し、世界萬國に對立するの大策なし、且朝廷微力にして、各藩各心、或攘夷

史實考證

# 木戸松菊公逸事

妻木忠太〔著〕

史實参照

# 木戸松菊公逸話

史實考證 木戸松菊公逸事

妻 木 忠 太 著

上篇 維新前の事蹟

自 嘉永六年  
至 慶應三年

○ 木戸氏の名稱

桂氏と木戸

古來毛利氏の臣には桂を氏とせるものが多々ある、其の桂氏の先は、概ね正四位下大江廣元七世の孫である匡時から出で、之を祖となしてゐる、毛利家の系譜にも、匡時は桂・坂・光永・志道・口羽等諸氏の祖とある、毛利氏の防長二州を領したる後、其の桂氏に寄組（上士）の士が二家（祿高壹千貳百餘石と貳千參百餘石）あつて、大組（中士）の士が十四家（祿高六百石より五拾餘石に至る）あつた、毛利氏諸臣の首位は一門で次が寄組である、寄組の次が大組であつて、後に八つに分れて之を八組ともいひ、他藩の馬廻格である、其の大組の士の桂氏の中に、桂波門といふ人があつて、此の家を人々が世々木戸桂と呼んでゐた、天保十四年が十七歳で參百貳拾五石餘の食祿であつた、それは波門の先祖に木戸氏を稱したものである、他の桂氏と別つて之を呼んだの

上篇 木戸氏の名稱

一

るが、參與福岡孝弟は書を送つて二人の東行につき、意見の異議なきを告げてゐる、其の公に送つた書中に「昨日拜承之關東行幸之御儀、先生並大木御苦勞被<sub>レ</sub>成候筋に付、格段に存慮異議も無<sub>レ</sub>之候」とある、是から公等の江戸に赴くに及び、車駕御行幸のことが、漸く一般に傳へらるゝに至つたのである。

○ 知己二人と江戸齋遺集の序文

知己の二人

公が尊王の大業に奔走盡瘁せるに方り、知己の親友は實に久坂義助と高杉晋作とであつた、義助は元治元年京都の變に二十五歳で戦死し、晋作は慶應三年に二十九歳で病歿し、公より六歳と七歳との年少であつた、公が王政復古の後に、明治政府に立ち、皇謨を翼賛し奉つて匪躬の節を竭盡したが

で長崎出張

國事に執掌

た烈士や、一

て夜に入り

知己の二人

○ 知己二人と江戸齋遺集の序文

公が尊王の大業に奔走盡瘁せるに方り、知己の親友は實に久坂義助と高杉晋作とであつた、義助は元治元年京都の變に二十五歳で戦死し、晋作は慶應三年に二十九歳で病歿し、公より六歳と七歳との年少であつた、公が王政復古の後に、明治政府に立ち、皇謨を翼賛し奉つて匪躬の節を竭盡したが、二知己の如く胸臆を諒解して忠告授助し呉れるものがなかつた、明治元年公が朝命で長崎出張の途次に、山口に寄つた、會々慶應元年このかた、共に山口藩政府の要路に列して國事に執掌した山田宇右衛門の墓に展した（別項、山田星山の墓に詣つ参照）忽ち往年難に殉じた烈士や、國事に盡瘁して病歿した有志を追懐し、其の苦心煩念を禁んじえなかつた、家に歸つて夜に入り、徐に古篋を探つて、義助・晋作の書を得て僅に其の憂念を鎮靜した、公の日載閩四

中篇 知己二人と江戸齋遺集の序文

一六三

# 『木戸松菊公逸事』 『木戸松菊公逸話』

## の復刻に寄せて

佛教大学歴史学部教授 青山忠正

この度、『木戸松菊公逸事』、『木戸松菊公逸話』の二冊が、マツノ書店から復刻される運びになった。ともに妻木忠太の著書で、木戸研究はもとより、明治維新史研究の基本文献のひとつとさえいえるもので、今まで復刻されなかったことが、むしろ不思議に思われる。

この二書が有朋堂書店から刊行されたのは、『逸事』が昭和七年十一月、『逸話』が昭和十年四月であった。それに先立つ大正中中期から昭和初期にかけ、妻木は、木戸の伝記の決定版ともいえるべき『松菊木戸公伝』上下二巻の編纂にあたっていた。同書は昭和二年に刊行される。妻木は、この他にも『周布政之助伝』上下、『久坂玄瑞遺文』など、多くの伝記を残し、防長幕末維新史研究の第一人者ともいえるべき人物であった。出身は山口県玖珂郡周東町で明治三年生れ。小学校教師を経て文部省の嘱託となり、大正元年から木戸公伝記編纂所の編纂主任に迎えられ、昭和十年前後、四十代で壮年の頃には、毛利公爵家が設けた毛利敬親・元徳両公伝編纂所の主任を勤めていた。

その妻木だから、木戸に関するエピソードの類は、文字通り山のように蓄積している。といって、それらの多くは、公式の伝記である『松菊木戸公伝』に掲載するような性格の話題ではない。妻木はおそらく、それらを世に公表したくてうずうずしていたのではなからうか。

このような経過を経て、木戸に関する、それこそ「逸事」を一書にまとめたものが『逸事』である。ただし、妻木は、ただ正伝に書ききれなかった事柄を、羅列したわけではない。書名にも『史実考証』と注記が入っているように、史実として確定できることだけを精選しつつ、安政年間から明治十年五月の死に至るまでを、具体的には『木戸孝允日記』の記事などを史料として補いながら、一貫した筆致で叙述している。

例を挙げれば、中篇「維新後の事蹟」のなかに、「版籍奉還建言後の苦心」（二二七頁以下）、及び「廃藩置県の遠由と売茶亭の密会」（二五九頁以下）という項目がある。これらは、もっぱら明治二年六月の知藩事任命が実現するまでの経過、さらに三年十一月に、鹿児島・山口・高知の三藩から親兵提供が決定し、その兵力が四年七月、廃藩置県を断行するにあたって、大きな拠り所となったという経緯を述べた部分である。これを読むと、木戸が「版籍奉還」を、大名を解消する方策として重視していたことが、むしろ正伝の叙述以上によくわかる。おそらくは著者の意図をも超えて、『逸事』が、日記や書簡など基本史料の内容を読み込むための助けという役割を果たしているのである。

もういっぽうの『逸話』は、『松菊木戸公伝』編纂に際し、生前の木戸本人を知る人物などに対して行ったインタビューの集成である。妻木は、その対象者の氏名はもちろんだが、インタビューが行われた年月日をも併記している。当然と言えばそれまでだが、間接的に聞いた談話は、それとして明記していることといい、プロの歴史家らしさを感じさせる。人数は約六十人で、著名人としては板垣退助、大隈重信、勝海舟、久米邦武、渋沢栄一あたりが挙げられるだろう。時期は、大正六〇七年が多い。木戸が亡くなってから、ちょうど四十年を経た頃で、生存者からの聞き取りとしては限界の時期であろう。

彼らが語る木戸の姿は、良きにつけ、悪しきにつけ、生き生きとしている。田中光顕（大正七年五月七日）の談話を聞いてみよう（四二頁）。

明治二年であったか、東京で木戸公に面会した時に、「世の中は桜の下の角力(すもう)かな」といふ俳句を書いて貰ったことがある。ところが、この俳句の意が分らないので、説明を請ふた。すると、公の言はるるに、御一新の際に、骨を折って働いた者は、何にもならず、却って骨も折らずに、傍観してゐる者が恩典に與(あずか)つてをる。恰(あたか)も之(これ)と同じことで、角力に一生懸命になつた力士は、勢いで下になつて土を食ひ、負けた方は上に向かつて花を見るではないかと、大不平の意があるので、実に面白いから今に之を保存してゐるのである。

木戸は、「御一新」の成果に、実は不満だったのだ。それを言い表すに、この一句に勝るものはない。『逸話』には、このたぐいの話が満載されている。木戸の人物像を知ろうえで欠かせない書物なのである。

このような内容を持つ二冊、木戸ファンならずとも、思わず読んでみたくなるはずと思うが、如何であらうか。

### 『木戸松菊公逸話』目次

(逸話提供者氏名)



浅野長勲、有地品之允(男爵)、板垣退助(伯爵)、石井省一郎、井関美清、諫早巳次郎、今井太郎右衛門、梅地庸之丞、上野理一、江川太郎左衛門、大隈重信(伯爵)、尾崎三良(男爵)、大倉喜八郎、岡部利輔、大江天也、勝安芳(伯爵)、河瀬貞孝(子爵)、河瀬秀治、梶山鼎介、門脇重雄、神田節三、何礼之、久米邦武、熊野九郎、日下義雄、児玉愛二郎、沢沢栄一(男爵)、末松謙澄(子爵)、周布公平、曾我祐準(子爵)、田中光顕(伯爵)、鳥尾小弥太(子爵)、野村素介(男爵)、服部三、土方久元(伯爵)、平田東助(伯爵)、広戸正蔵、細川潤次郎、益田孝、三浦梧楼(子爵)、森山茂、山尾庸三(子爵)、渡辺蒿蔵、中島茂子、廣江すみ子、松田龍子

### 『木戸松菊公逸事』目次

- ・政権奉還の急迫と薩長二藩出兵に対する思慮周密
- ・宇治の萬碧楼を愛す
- ・鳥尾小弥太は壮年中秀才の一人
- ・山縣有朋御堀耕助に洋行懲瀆
- ・御堀耕助の死去痛惜
- ・国語の洋字綴録便利論
- ・東泉靖国神社の創設
- ・中井範五郎の死を憐む
- ・金沢の東屋及び千代元に休泊す
- ・松崎洪右衛門の横死痛惜
- ・大村益次郎との関係征韓論の首唱
- ・松江屋の屋号許容
- ・小松帯刀の心事未遂を矜憐
- ・六戸磯との抗論
- ・廃藩置県の遠由と売茶亭の密会
- ・伊藤博文等の洋行を喜ぶ
- ・広沢真臣との交情と遭難の悲嘆憤慨
- ・人力車試乗
- ・毛利元徳の華士族廢止建白の諫言
- ・徳川慶喜の登庸痛論
- ・渡邊昇との親交と断髪
- ・始めて汽車試乗
- ・帰農の意あり
- ・東京市区改正計画の嚆矢
- ・英人シヤンドとの関係
- ・山内豊信との交情
- ・下編 維新後の事蹟
- ・父母厚恩の追慕
- ・条約改正商議の苦心と森有礼の輕放
- ・新島襄と同志社大学前身
- ・松村淳蔵の成績優秀を喜ぶ
- ・異域にあって感慨骨髓に徹す
- ・ビスマルクの演説に応酬
- ・西園寺老公との関係
- ・憲法制定の建言と其の顛末
- ・元老院設置の首唱と制度変更意見
- ・法律に依つて国民保護基礎の助成冀望
- ・辞表提出と鳥津久光の抑留
- ・車駕師範学校小学校へ御臨幸
- ・兵隊為政の概歎
- ・元老院章程の紛議と其の解決
- ・板垣退助との関係 大阪會議の顛末
- ・英人パーソンとの交情 キドパーソンの命名
- ・独逸人リットルの碑面に揮毫
- ・丹心の誠誓を以て國家の安泰に報せんとす
- ・揮毫の朝命を拝す
- ・日時隆之進の靈に祭祀料を供ふ
- ・日光満願寺三佛堂の保存
- ・皇后の御臨啓とやもめ魚の下賜
- ・皇后女子師範学校へ行啓
- ・國民の救済せらざる大遺憾
- ・養生社と甲子の祭典
- ・地租改正の緩延と地租輕減の建言
- ・大久保利通との政見齟齬と入閣拒絶
- ・最終の詩
- ・西南戦役鎮定後の施政極論
- ・島津久光父子へ勅使差遣の廟議に反対
- ・熊本城下窮民救恤の切論
- ・鹿児島県の弊害及び同県々政改革の痛論
- ・熊本城連絡後の閣員緩急深憂
- ・西郷隆盛との関係廢藩置県の断行
- ・最終日載の記事
- ・木戸氏の名称
- ・松菊と広寒及び竿鈴との雅号
- ・水戸藩士と交際の始
- ・露人の造船を觀る
- ・吉田松陰の獄中推薦
- ・吉田松陰遺骸の埋葬と留魂録の通説
- ・周布政之助との関係
- ・藤田東湖の書幅秘愛
- ・内田萬之助の自殺と幕吏の嫌疑
- ・長藩世子の東下輔佐と決死の覚悟
- ・徳川齊昭の追贈を賀す
- ・將軍帰東の抑止と用心金の脱落
- ・海外洋学の決心と伊藤俊輔
- ・山尾庸三等の帰朝
- ・長藩主父子及び周布政之助の帰国希望世子の親書
- ・堺町門変後の悲憤血涙と今様歌
- ・長藩世子再び親書を賜ふ
- ・門脇重孝の救助した説話の疑点
- ・英國公使パークスの所説を駁論す
- ・時計双眼鏡及び長靴等洋品の買得
- ・中岡慎太郎の公及び南洲東行の人物評
- ・処女脱兎説と苦慮尽瘁
- ・仏国公使の詰責弁駁と長田珪二郎に再会
- ・前田孫右衛門の遺品を求む
- ・長藩世子の英艦縦觀
- ・四境戦勝後の用意と幕府の三征説
- ・版籍奉還建言後の苦心
- ・億兆安撫國威宣布の御宸翰
- ・ヒコとの交際
- ・鍋島閑叟松平春嶽秋月種樹との親交
- ・外交傾注と洋製馬車の始乗
- ・天顏の奉拝と内外の大勢奏上
- ・江藤新平の推薦
- ・人材拔擢論と井上馨・伊藤博文の推薦
- ・始めて牛肉を食ふ
- ・山田星山の墓に詣づ
- ・兒戲多き廟議 車駕御東幸密議の始
- ・知巳二人と江月齋遺集の序文
- ・江戸城に宿泊の始
- ・東京遷都
- ・岩倉具視の北越出張諫止
- ・胸難志士祭典の始
- ・殉難の剖破を覚ゆ
- ・乗馬の天覽と敬慎二字の深戒
- ・維新後万歳奉唱の始
- ・竹鞭の下賜
- ・中井弘蔵(櫻州)の詩作称赞
- ・大洋及び品川海の觀覽
- ・官吏減俸の嚆矢と寄食者
- ・福島屋の妻(?)と公の櫻平清の詩
- ・万国公法は弱國掠奪の武器
- ・東京にて撮影と洋戯との始
- ・明治元年二年の外人面接
- ・普通教育振興の建言と幼稚園及び盲啞学校の嚆矢
- ・相撲の縦觀と歌謡
- ・上野桜花の縦觀解禁

## 予約限定復刻

『木戸松菊公逸事』 六三〇頁

■予約特価 九千円(送料別)

『木戸松菊公逸話』 六六〇頁

■予約特価 九千円(送料別)

以下「逸事」「逸話」とも同じです。

■体裁 A5判上製函入

■定価 各一万一千円(税・送料別)

■予約締切 27年10月20日

■発売 27年11月下旬

▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK

山口県周南市銀座2-1-13

マツノ書店

URL <http://www.matuno.com>